

東方不敗継承者が行く！
ブラック・ブレット

silverArk.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはあり得なかった物語

目次

東方不敗継承者が行く！ブラック・ブ

レット

1

東方不敗継承者が行く！ブラック・ブレット

拳を継ぐ者

生物がいた。毛が生えた八本の長い脚、頭部には四対の真つ赤に光る単眼。鞠の様に膨らんだ腹部と細い胴体がアンバランスさを持っている。口角から伸びた二本の牙は濡れて光っていた。さらに黄色と黒の斑模様が生理的嫌悪感を滲ませる。

ここまで描写したならば誰だろうともこの生物が分かるだろう。蜘蛛である。だがこの蜘蛛はそんじよそこの普通の蜘蛛ではない。ガストレアウイルスに感染した巨大蜘蛛である。

二〇二一年に発生したこのウイルスは感染した相手のDNAを書き換え、バケモノとしてしまう。その生命力は強靱であり、バラニウムというガストレアの再生を阻害する金属でしか倒せないと言われる。

通常の兵器では倒せないガストレア。そんなバケモノの前に一人の少年が立っていた。

年の程は十七から十八。乱雑に切られた黒髪に、眼光鋭い黒眼。頬には一文字の傷。高校の制服を着崩して纏い、両手をだらんと下げていた。

傍から見れば目の前のバケモノに絶望し、死を受け入れんとする者の姿だ。だが、その実は違う。

だらりと下げていた両手を構え、腰を落とす。素手での徒手空拳で戦う者の姿だった。

「ガストレア——モデルスパイダー・ステージIを確認。交戦を開始する!」
交戦の意思を感じたのか、それとも餌を見つけたと思ったのか。巨蜘蛛はシイイと鋭い警告音を奏でる。

次の瞬間、巨蜘蛛が動いた。低い姿勢からの飛び掛り。人間の反応速度など遥かに上回った速度で飛び出す蜘蛛。その標的は勿論少年だ。

飛び掛る蜘蛛。そのスピードのまま蜘蛛は少年に激突し——吹き飛んだ。少年では無く蜘蛛が。

飛び掛った蜘蛛の頭部は巨大な金属ハンマーで殴られたかのようにグシャグシャになっている。無論、それをしたのは少年だ。カウンター気味に突き出された正拳突きで頭部を粉碎したのだ。

しかし、その粉碎された頭部はビデオの逆再生の如く治癒を開始した。それも当然。

少年の手には何も付けられてはいない。本当の意味での素手である。

少年はそこで終らない。治療中で行動の出来ない蜘蛛に素早く接近するとその胴体を蹴り上げたのである。

全くのノーモーションでの蹴撃。しかし、その蹴りは巨大な蜘蛛を夕日煌く空に撃ちはなつたのである。その高さ、十メートルは堅い。ここまで来ると少年は本当に人間なのか疑わしいレベルである。

「延珠」

「任されたー」

静かな少年の声に、快活な少女の声が応えた。

年の頃は十歳前後。お洒落なコートにミニスカートを履き、厚底の編み上げ靴を履いている。特徴的な緋色のツインテールは大きめの髪留めで結われていた。外見的には普通の少女となんら差異は無い。が、一つ大きな差があつた。普段は黒い少女の瞳は真つ赤に輝いていた。ガストレアと同じ真つ赤な眼。

その正体はイニシエーター。ガストレアウイルスを持つ超人的な少女であり、少年の相棒だ。

そんな少女が少年の後ろから飛び出した。

自身の力を使つての跳躍。そして、ガストレアへと接近すると無防備な腹部に踵落とし

を放った。

緩やかに自由落下と洒落込むはずが、ジェットコースター。哀れ、蜘蛛は地面へと急速落下。アスファルトへと叩き付けられる。

人間ならばとうにくたばっている筈の攻撃。だが、強靱な生命は死なない。再び再生をせんと活動をする。

しかし、それは少年が許さなかった。少年はなにやら型を取ると、裂ぱくくの声を発する!

「流派、東方不敗——超球霸王!電影だあああんん!!」

叫び声と共に少年は身体に回転する気を纏い、蜘蛛へと突進した。『気』を纏って放つその技は、何故か本人の頭部は露出しているとういう謎仕様だ。

一発の巨大な弾丸となって突撃する少年。治癒に専念する蜘蛛には回避のすべは無く——その身に巨大な風穴を開け、絶命した。

「いやあ、助かったぜ!流石は民警だ!」

「そりやどうも。で、報酬だが」

「分かっているよ。何時もの口座に振り込んでく」

フレンドリーな様子で少年に話しかけるのは、警察の警部だ。多田島というこの警部と少年はわりと長い付き合いである。そんな二人は慣れた様に何時ものやり取りをしていた。

大口を開けて笑う多田島。それに少年が苦笑を漏らしていると、不意に制服の袖が引かれた。

首を巡らせてその犯人を確認する。果たしてその犯人は延珠であった。延珠はニコニコとしながら何かをアピールしてくる。一瞬、何を指しているのか分からなかった少年だがややもして気付いた。

「良くやったぞ延珠。今日は何がいい？好きな物を食わせてやるぞ」

そう言つて頭を撫でる少年。撫でられている延珠は猫の様に眼を細めて堪能していたが、唐突にその手を掴むと少年を自分の方に引っ張った。

そして、素早く首に手を回すと不意打ちに少年の唇に自分のそれを押し付けた。そして、身体をバツと翻すと顔を向けてはにかんだ。

「ふふ、ありがとう蓮太郎。流石は妾のパートナーだな。格好良かったぞ」

何時もの事とは言え、突然の事に硬直する少年——蓮太郎。
だが、素早くその硬直を解き、言葉を発した。

「お、おま。人前ではすんなってあれほど……」

「なら家ならばいいのか? 妾はどちらでも構わんが」

蓮太郎はすでに諦めの境地に達しかかっていた。精神年齢は既に老人に近い彼だ。子どもの戯言と思つてはいるが、人前でされては不味いの一言に尽きる。

「あのなあ、ちーとは自重つてもんをな? おっさんも言つてやつてくれよ」
あまりに真つ直ぐな瞳に少したじろんだ蓮太郎は多田島に助けを求めた。

「んあ? ああ、まあいいじゃねえか。誰も気にしねえよ」

すると多田島は蓮太郎の肩にポンと手を置き、言葉を続けた。

「大丈夫だ。皆知つてるよ、お前は——ロリコンだつてな」

衝撃の一言。その言葉に蓮太郎は俯いて肩を震わせる。そして、ガバツと顔を上げると咆哮した。

「だから! 俺はロリコンじゃねえええツツ!!」

崩壊した世界を押し止める者、民警。彼らは二人一組で戦う。

イニシエーター
開始因子と加速因子。

身に修めた力でガストレアと戦う——人類の最後の希望。

そして、このお話の主人公は里見蓮太郎。相棒の藍原延珠と組んでいる。

そのIP序列は千番。

だが、悔る無かれ。彼の實力はそんなモノではないのだから。このお話は、そんな彼らが崩壊した世界を行き抜く話――。